

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.11 セメント梵鐘

セメント梵鐘。聞きなれない言葉かもしれない。これは文字どおりセメント製の梵鐘である。梵鐘すなわち仏教法具である釣鐘は、通常はブロンズ製である。梵鐘を撞いたり叩いたりすると音が発生、特に除夜の鐘として知られる余韻の長い音色は、人々に情緒的な感覚をもたらす。これに引きかえセメント梵鐘は、撞いても小さく鈍い音が発生するばかりで、梵鐘としての役目を果たさない。それではなぜセメント梵鐘は存在するのだろうか。

中道寺（東京都杉並区、日蓮宗）に残るセメント製の梵鐘（図1）。これは代用梵鐘だ。もともと鐘楼（鐘つき堂）に吊るされていた金属製の梵鐘が戦時中の金属供出で失われ、その代わりとして吊るされていたという由来を持つ。セメント製は境内にそっと置かれ、由来や経緯を伝える説明板もなく、その存在はややもすれば見過ごされるかもしれない。梵鐘の頭頂部の錆びた金属製の龍頭（梵鐘を吊るす部分）、腐食した鉄線や不揃いな大きさの砂利の露出、緑の苔に覆われた鐘身などは、戦争という厳しい時代背景と長い時間の経過を感じさせる。

本来の主であった金属製の梵鐘は、江戸時代の1742（寛保2）年に作られ、目方120貫（約450kg）を誇ったと伝わる。鐘楼を兼ねた山門に吊るされ、その美しい音色を周囲に響かせていた。ところが、1930年代から1940年代に続いた戦争がこの梵鐘の運命を一変させた。戦争の長期化と戦況の拡大により物資拮据が深刻化、1947（昭和17）年に公布された金属回収令では、「必勝へ活かす家庭の銅と鉄」「決戦だ残らず出さう鉄と銅」というスローガンの下に徹底した金属供出が実施され、一般家庭の金属類はもとより、全国各地の寺院の仏具や梵鐘も強制的に回収された。回収された金属類は溶解され、銃器の弾丸あるいは戦車や戦艦などの軍需品の原料となった。

掲載の写真は（図2）、戦時物資活用協会の倉庫前に並べられた「愛国梵鐘」であると記事は伝える（『写真週報』第151号、情報局、1941年）。記事の見出しの「還俗式」とは、僧が僧籍を離れて俗人に戻る際の儀式で、寺院を離れ国家に応召される梵鐘の様子を例えたものである。

戦時中は時代の要請に応じる形で、セメントを主原料とする仏具類が制作された。供出された金属製仏具の代替となる新たな仏具が必要とされたからである。1942（昭和17）年、文部省・商工省戦時物資活用協会・代用品協会・大日本仏教会・仏具代用品仏具研究家・仏具商などが委員となり仏具類規格協議会を開催し、仏具類に関する新規格が決定され、新規格に沿った仏具類の生産が約束された。

委員の一人だった矢崎好幸は、東京美術学校（東京芸術大学の前身）に仮設された臨時セメント美術教室の講師を務めていたこともあり、美術界が直面する資材不足の苦境に通じて

いた。戦前のセメント美術の大成者である矢崎は、美術界を代表する形で「セメント製仏具の製作について」「仏具代用品の新規格と生産の実際問題」と題した2編の論文を雑誌『物資』（生産と配給社、1942年）に発表し、戦争を背景とした金属不足が深刻化する中で、セメントを用いていかに仏具を制作すべきかについて持論を展開し、物資払底における仏具制作という現実問題への対応策を模索している。

前者の論文では、新規格の概要説明の後に、セメントに混ぜる各種素材の配合表のほか、セメント製仏具の生産方法などが図入りで丁寧な解説されている。後者の論文では、蠟燭立・花立・香炉など複雑多岐にわたる形状をした仏具の生産の難しさが述べられている。両論文では、美術的な観点からのセメントの活用方法が具体的に提案されている。

もっとも、新規格で用いる素材は、セメント一辺倒だったわけではなく、仏具のサイズに応じて変化し、「大物」はセメント、「中物」は陶磁、「小物」はガラス、と大まかに使い分けられたという。代用梵鐘は「大物」に相当したのだろうか。仏具代用品の生産にあたっては、代用品協会が商工省より生産命令を受け、日本セメント製品工業組合連合会・日本陶磁器工業組合連合会・日本硝子工業組合連合会らが連携を取りつつ実施されたと伝わる。矢崎は仏具代用品を「決して一時の間に合わせもの」ではなく、「科学と技術の創意による新生産資材の登場」と意義づけている。戦時という特殊な状況下で、さまざまな材料の利活用が試みられたのである。

中道寺に話を戻そう。梵鐘の撤去後、新たな問題が生じた。重量約450kgの主を失い身軽になった鐘楼が強風により倒壊してしまう危険性が指摘されたのである。その被害防止策として、セメントを原料に梵鐘と同じ重量の梵鐘を作り、それを重りとして鐘楼に吊るしたという（森泰樹『杉並風土記』上巻、杉並郷土史会、1977年）。このセメント梵鐘は、金属製の梵鐘とは異なり音がならず、時報や警報の役割は果たせなかったものの、鐘楼のバランスを保つ重り（ balanサー ）としての役目を立派に果たしたといえよう。このようなセメント梵鐘は、大應寺（埼玉県富士見市）など、全国各地に残されている。



図1 セメント製の梵鐘



図2 全国から集められた金属製の梵鐘（出典：『写真週報』第151号）